

巻頭言「社会力の育成のはじめの一步」～出会いに感謝～

教育研究所連絡協議会委員長 永山 健治

教師としての悩みは、言葉では簡単に言い表すことはできません。なぜ、教師としてこんなにも苦しみ、悩まなければならないのか？辞めようと思ったことが何度もありました。それなのに、なぜ、今も続けることができているのか、それは先生という仕事が、「好き」だから。そして、目の前に夢を持った子どもたちがいたから。さらに、自分を支えてくれている仲間や保護者、そして身近な方々がいたからです。

こんな言葉を先輩からいただいたことを思い出します。『荒波ほど、絶景を創る』『困難ほど、感動を得る』つらい思いをしたり頑張ったりすればするほど自分自身の成長につながり、また、喜びも倍増します。自分を成長させてくれるのは、すべての人々のおかげです。人と人がかかわることで生まれるエネルギーを大切にしたいです。コンピューターがどんなに進化しようとも、教育の基本は「人間」です。だから、そこには、「人の情」と「人の縁」が生じてきます。それに気づき、大切にしてきた人が素敵な人生をおくることができるのではないのでしょうか。

これからも一人ひとりが、出会いを大切にし、そして出会えたことへの感謝の気持ちを持ち、感謝と思いやりで満ち溢れる小田原の子どもたちになって欲しいものです。人とのかかわりを大切にするおだわらの教育・「社会力の育成」は、この感謝の心から始まるのではないのでしょうか。

< 研究所便り > 「これからの教育を共に考える」～おだわら未来学舎～

教育指導課指導主事 若月 拓也

令和 5 年度も小田原の子どもたちのために、教育への理想と情熱をもった教職員を支援することを目的に先生方のニーズに応じたテーマを設定し、「おだわら未来学舎」を実施しました。昨年度に引き続き、オンラインでの参加が可能になるよう開催し、多くの先生方に空間を越えて参加していただいています。今後も引き続き様々な課題に積極的に取り組むためのエネルギーや教職員としての力（学級経営力・授業力・人間力等）を高めることにつなげていく予定です。

「探究的な学びとは何か～発酵・醸成・創発としての学び～」

< 講師 小林宏己 先生（早稲田大学教授） >

第 1 回

我々教職員も自己決定をし、対処し続け、また、子どもの学びの中にも「事中修正」という言葉を意識することの大切さを学ぶことができました。

論理的な考え方や追及ももちろん必要だが「なぜ？」「おや？」と感じたり、問いにとことん向かっていく気持ちも大切。探究とはきれいに進むものではなく、時間がかかるものでもある。

目の前の子どもの状況を把握することを意識し、多様な子どもの支援におけるカリキュラム、well-being な視点を大切にしてほしい。これが小田原が目指す「社会力の育成」につながる

見取りだけに意識がいくのではなく、子どもたちに今、何が必要なのかを考え、学習の場として評価活動を位置づけることの必要性を学ぶことができました。

「児童・生徒の成長に寄与する指導と評価

の充実・改善」

< 講師 笠原陽子 先生（玉川大学客員教授） >

第 2 回

小田原版STEAM教育に関する研究

—小田原をフィールドとした探究的・創造的な学びの展開を目指して—

〈研究員〉◎椎橋 泰之（城山中）／○西山 篤（城南中）／中谷 祐介（白山中）
新居田 薫（国府津中）／山本 弥栄子（酒匂中）／海老原 将（橘中）

本研究は、令和4年度より2年間の先行研究でした。本年度は前年度に構築した小田原独自の理念を踏まえ、実践案を作成し、研究員による授業を行いました。小田原版STEAM教育の肝は「探究のプロセス」。そのプロセスを経験することを通して、生徒一人ひとりが地域の問題の解決に向けて考えアイデアを生み出しながら、探究の仕方を習得することが大きなねらいです。

城山中学校では、生徒が小田原の伝統工芸「小田原鋳物」について探究しました。鋳物職人との出会いを通して、市内に一軒しかない「小田原鋳物」の現状を知り、「小田原鋳物の知名度をあげるにはどうしたらよいか」「小田原鋳物の新しい商品はどうなものがよいか」という問題の解決に向かうことになりました。生徒が鋳物の長所や短所、現状市民は鋳物に対しどんなイメージをもっているのか等、様々な情報を集めながら解決策を考えていきます。さらに友達や先生、家族などいろいろな人に試し、改善を重ね、練りあがった解決策を、鋳物職人の方へプレゼンテーションしました。12月の公開研究会では、その場面を各中学校の総合的な学習の時間の担当者にも見ていただきました。

中学生なりの解決策のため、大人にとっては未熟なものもあります。しかし、解決策の出来栄でなく、生徒が、いろいろな教科の力や外部の人とのコミュニケーションで得た情報を生かし、自分なりに解決策を考え形にするまでの探究過程は、まさに主体的で対話的な学びとなっています。その学びの姿を見とり価値づけることの大切さも研究で明らかになったことの一つです。



解決策について相談する生徒たち

ある教室から「子どもたちの学びを高める土台（環境）づくり」

教育指導課指導主事 柳下 仁志

ある小学校の算数の授業を参観する機会がありました。授業者は採用3年目の先生でしたが、教室に入った瞬間に担任と子どもたちとの関係性の良さを感じました。その理由は、まだ授業が始まる前でしたが、クラスの児童全員が担任を注目し、何気ない会話のやりとりを楽しんでいたからです。その光景を見て「ああ、いい雰囲気クラスだな」と直感的に感じ、その後の授業への期待に胸を膨らませました。実際の授業でも、発言者を見る・聞く・待つなどの学習姿勢が身に付いた児童の姿や、特別支援学級に在籍する児童が挙手して発言したり、前に出て発表したりすることができる温かい雰囲気で授業が進みました。課題に向き合ったり、お互いの考えを伝え合うなど、子どもたちの声が多く聞こえる児童主体の授業に、参観していてとても心温まる気持ちになりました。

＜授業者の工夫＞

- ・子どもたちの声（反応）からめあて設定をすることで、自分事として捉えさせている。
- ・復習の時間や補助教材の準備など様々な学習の手立てを用意している。
- ・自分の考えをアウトプットする場面を意図的に設定し、知識の定着を図っている。 など

子どもたちの学びに向かう意欲を高めるために、授業者が様々な手立てを講じることはもちろん大切なことですが、その手立てをさらに効果的にするためには、子どもたちが安心して学習に取り組める環境、つまり、授業者や児童生徒同士の信頼関係（土台づくり）が大切です。普段の何気ない会話や授業前の雑談などをとおした、安心・安全な学習環境づくりの重要性を改めて実感しました。